

目標および成果指標の設定 記入様式

活動団体名： 西表島農業青年クラブ

上位関連計画にみる地域の将来
 ○竹富町総合計画第9次基本計画（令和2年～令和6年）
 農業・漁業と観光業の適正なバランスがとれた町
 ①竹富農業振興地域計画の改定、②農業生産基盤整備、③農業・漁業の担い手育成、④農業の機械化・近代化、
 ⑤農産物多様化・高付加価値化、⑥農産物の集出荷等の流通体制整、
 ⑦広域廃棄物の堆肥等活用による循環型社会の構築備、⑧畜産基盤の整備と経営の向上

②具体的な取組
 ・牛糞堆肥づくり：農家、畜産農家
 ・牛糞堆肥による農産物の生産：農家
 ・農産物の販売（地産地消）：島内ホテル、学校給食、農家（直販）、スーパー
 ・西表島産の牧草とお米を食べた牛肉：農家
 ・普及啓発（ブランド化）：行政、商工・観光・環境に関する団体
 ・家庭用生ごみ発酵ボックスの普及：一般家庭や宿泊施設、飲食店等
 ・生ごみ堆肥づくり：農家
 ・生ごみ堆肥を使った作物の生産：農家

③短期目標

分野	小項目	成果指標	現状値	目標値 (2022年度末)	実績値 (2022年度末)	単位
環境	農家の環境配慮に対する意識の向上	先進地の視察	1	1		回
	地域住民の意識の向上	生ゴミ堆肥ボックスの導入数	0	5		個
	農薬や化学肥料を減らす	取組農家数	0	1		戸
経済	たい肥化実証試験	堆肥生産の有無	1	1		回
	生ゴミ堆肥生産	堆肥生産の有無	0	1		回
	牛肉の地産地消	牛肉販売の有無	0	1		回
	米農家の所得向上	反当りの収入	0	10		%
	畜産農家の所得の向上	経産牛をすぐに販売時の所得	0	5		%
	観光客の満足度の向上	宿泊の魅力が増えたか	0	10		%
社会	島内関係者への取り組みの周知	意見交換会	1	1		回
	島民が島を誇りに思えるか	取組に魅力を感じるか	0	10		%

→

→

①ありたい未来
 西表島内で資源が循環し、地産地消が実現しさらに島全体が「有機栽培の島」というブランドを作りたい。
 1.稲作農家はお米を作付け、島内で粳摺り・精米する（粳殻が発生する）。
 →輸送コスト・中間コスト減のため、農家の所得向上
 →地産地消の促進
 2.畜産農家は粳殻を牛の敷草代わりに活用する。
 →敷草のコスト減のため、畜産農家の所得向上
 3.粳殻入りの牛糞を堆肥化する。
 →化学肥料のコスト減、より良い土になり、農産物の品質向上
 4.牛糞たい肥を稲作農家が活用してお米を作付け・生産する。（→1.に戻る）
 →たい肥の活用に加え、減農薬・無農薬で有機栽培を推進。世界自然遺産の農産品であることも相まって付加価値向上。
 5.生ごみの堆肥化と経産牛の肥育と販売
 →生ゴミを堆肥化する事で効率的に堆肥化が行え、島民も自分事としてとらえる事ができる
 →経産牛を肥育する事で畜産農家の所得向上と、牛肉の地産地消、米農家の所得向上、観光価値の向上に繋がる

④長期目標

分野	小項目	成果指標	現状値	目標値 2022年度末	目標年度 2030-2050年度	目標値	単位
環境	牛糞の野積みの低減	参加畜産農家数	0	10	2030年度	15	戸
	農薬の低減	無農薬に取り組む戸数	2	10	2030年度	20	戸
	化学肥料の低減	無化学肥料に取り組む戸数	1	6	2030年度	20	戸
	水生生物の数の向上	水生生物の向上数	1	20	2030年度	100	%
経済	米農家の所得向上	飼料用米生産の場合の所得の伸び率	1	10	2030年度	30	%
	米の農家の所得向上	地産地消の場合の所得の伸び率	1	10	2030年度	50	%
	畜産農家の所得の向上	経産牛をすぐに販売時の所得の伸び率	1	5	2030年度	15	%
	観光客の満足度の向上	宿泊の魅力が増えたか	1	20	2030年度	50	%
	学校給食の地産地消率	有機栽培作物比率	0	20	2030年度	60	%
	雇用の創出	本取組に関わる雇用人数	0	10	2030年度	20	人
社会	子供の健康	健康児の向上数	1	5	2030年度	10	%
	観光の食への満足度	宿泊者の満足度	1	20	2030年度	40	%
	ゴミの削減	使うゴミ袋の減少量	1	10	2030年度	20	%
	有機栽培の島	西表島の農業に対する有機のイメージ	0	10	2030年度	30	%

→

→

⑤短期指標が長期目標にどのように関わるのかお書きください

資源や経済の循環の実現により、輸送コストの大幅削減、農業資材の購入代の抑制、商品の高付加価値化、生物への悪影響の低減、観光の満足度や地域住民の満足度など様々なメリットが生まれます。そして地産地消が進めば、過剰包装の抑制とゴミを減らすことにも繋がります。そのような社会を作り出せる事で、人々の意識が変わっていき、地域循環共生について考える人が増え、新たな地域循環共生のアイデアが生まれ、その取り組みを応援する人々が増え、好循環を生み出せると考えています。